

折に触れ 四字熟語

NO. 37 『春愁秋思』 しゅんしゅう しゅうし

< 意味 > 春の日にふと感じる物悲しさと、秋にふと感じる寂しい思い。よい気候のときに、なんとなく気がふさぐこと。また、いつも心のどこかに悲しみや悩みがあること。

< 出典 > 白居易

「陵園妾」

— 憐幽閉也 —

りょうえん しゅう
陵園の妾

幽閉を憐れむなり

陵園妾

顔色如花命如葉

命如葉薄將奈何

一奉寢宮年月多

年月多

春愁秋思知何限

・・・

りょうえん しゅう
陵園の妾

顔色は花の如く、命は葉の如し

命は葉の如く薄し、將に奈何せんとする

一たび寢宮に奉じてより年月多し

年月多し

春愁 秋思 知らず何の限りぞ

語 釈 : 「春愁」は春の日のもの思い、春に感じる哀愁。「秋思」は秋の寂しいもの思いの意。

「陵園妾」は天子の御陵に奉仕する宮女。「命如葉薄」は木の葉のように薄命。「寢宮」は御陵わきに天子平生の居室になぞらえて造った宮殿。「知何限」は限り知れぬほど。

一 言 : 春シリーズその2

御陵のもり役として幽閉された宮女を憐れんだ白居易の詩の冒頭六行です。

参照文献 : 中國詩人選集「白居易 上」 三省堂「四字熟語辞典」